

第6次地域福祉活動計画

令和7年度（2025年度）～令和10年度（2028年度）

（案）

令和7年（2025年）4月

社会福祉法人 練馬区社会福祉協議会

はじめに

社会福祉協議会ってなにをすところ？この質問に答えられる人はそんなにいないでしょう。聞いたことはあるけどよく知らない、というところでしょうか。

この冊子は、これからの4年間の練馬区社会福祉協議会（社協）が目指す姿を示し、住民と伴走する様々な事例を見ていただき、社協を身近な存在として感じ、理解していただくための冊子です。

この計画策定にかかわった委員の16名は、それぞれ地域で様々な課題に接しながら懸命に活動している方々で、課題を共に解決するために社協とのつながりを持ってきた人達です。

課題は地域にあり、身の回りにあるものです。悩みや相談がその人一人のものではなく、社協とつながりを持つことで同じ問題を抱える仲間に出会ったり、解決の方向を見いだせたりします。社協としてもそれを普遍的な地域の課題として向かい合い、共に考えることに努力してきました。

委員は5年にわたり、社協がどうすればもっと住民の課題にこたえられるのか、多様化する人々の悩みに寄り添えるのかを考えてきました。

それには、人間の底に潜む差別意識を振り払うことや、外国人が抱える問題、DV、子どもの貧困、高齢者の孤立など変わりゆく社会に新たな知識と感覚で対応することが求められていきます。

地域に出て、活動する皆さんにインタビューもしてきました。社協は知名度が低い。もっとPRをと言われました。社協に相談してよかった、多くの機関やボランティア団体とつないでくれて解決した。とうれい話も多く聞きました。

社協はやはり、「人と人をつなぐこと」を求められているようです。

1つの話を聞き逃さない、誰が、どこが、何を提供すれば解決に結びつくのか。今練馬には多くの機関やNPOやボランティア団体があり、結びつきさえすれば知恵も場所も提供してくれます。

多くの事例が提示されています。些細な出来事が大きな動きを作り出す例や、一人の気づきから地域の輪へとつながった例など、わかりやすく作りました。

何かあったら、「まずは社協に相談してみよう」と思ってもらえたら幸いです。

練馬区社会福祉協議会 地域福祉活動計画策定・推進評価委員会
委員長 山浦 成子

「認め合う」「つながる」「参加する」地域共生社会をめざして

地域福祉活動計画策定・推進評価委員会で検討を重ね「認め合う」「つながる」「参加する」を計画の柱とする第6次地域福祉活動計画を策定しました。計画期間は令和7年度から10年度までの4年間です。

地域福祉活動計画は「認め合う」「つながる」「参加する」地域共生社会を目指し、暮らしやすい地域づくりに関心を寄せる多くの皆さんと共有したい考え方を整理し、様々な地域活動の輪を更に広げていくために策定しています。

練馬区社会福祉協議会（社協）は「ひとりの不幸も見逃さない～つながりのある地域をつくる～」という基本理念のもと、地域の中にある様々な生活課題を、行政機関や社会福祉法人等の専門機関、民生・児童委員や地域団体に活動されている皆さん、ネリーズをはじめとする広範な区民の皆さんとネットワークを組んで解決していきたいと考えています。

社協は、暮らしやすい地域社会づくりを進めるプラットフォームです。暮らしの中で生きづらさを感じている方、どんなお悩みでも、どうぞ社協にご相談ください。地域づくりや地域活動にご興味のある方、どうぞ社協にご相談ください。皆様からいろいろなご意見を伺いたいと思っています。それぞれのお悩みを解決し、ご希望を実現するために、共に考え、地域のネットワークと連携して取り組んでまいります。

この度の計画策定に当たっては、策定委員の皆さんのご意見により、地域での様々な具体的な活動を紹介するなど、できるだけ読みやすくなるように工夫しています。目次に沿って読んでいただく必要はありません。ご興味のある所からご覧いただければ幸いです。

練馬区社会福祉協議会 会長 田中 敏

「社会福祉協議会（社協）」とは

民間の社会福祉活動を推進することを目的とした、非営利の民間組織です。昭和26年（1951年）に制定された社会福祉事業法（現在の「社会福祉法」）に基づき、設置されています。

社会福祉協議会は、地域に暮らす皆様のほか、民生委員・児童委員、社会福祉施設・社会福祉法人等の社会福祉関係者、保健・医療・教育など関係機関の参加・協力のもと、地域の人々が住み慣れたまちで安心して生活することのできる「福祉のまちづくり」の実現を目指し、様々な活動を行っています。

目次

新しい時代の扉を開く地域福祉活動計画に期待する・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第1章 計画の策定にあたって

1 策定の目的・基本理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

2 これまでの経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

3 練馬区との連携・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

4 効果的な情報発信・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第2章 練馬区を取り巻く状況

1 地域社会の担い手の変化・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

2 誰もが支え合う「地域共生社会」～受け手と支え手の関係を超えて～・ 9

3 「権利擁護支援」と地域共生社会の推進・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

4 重層的支援体制整備事業～複雑化・複合化した課題への対応～・・・・ 10

5 「コロナ禍に顕在化した地域課題」と新たな地域活動・・・・・・・・・・・・ 11

第3章 第5次地域福祉活動計画の振り返り

1 計画が目指したもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

2 成果と課題・・ 13

(報告) 地域福祉コーディネーターの実践～気づき・つなぎ・広げる～・ 17

第4章 第6次地域福祉活動計画

1 計画の理念	21
2 計画の柱	21
3 3つの推進力	22

計画の体系図	25
--------	----

取組項目

柱1-取組項目1 包括的に相談を受け止める	27
柱1-取組項目2 その人らしい地域生活を支える	29
柱1-取組項目3 「共に生きる力」を育む福祉教育	31

柱2-取組項目4 地域の住民・団体・企業の連携を推進する	33
------------------------------	----

(活動紹介) 思いがつながり大きな力に	35
---------------------	----

柱2-取組項目5 地域課題を共有できるネットワークづくり	37
------------------------------	----

(活動紹介) ネットワークでつながり、広がる	39
------------------------	----

柱2-取組項目6 災害に備えた地域づくり	41
----------------------	----

柱2-取組項目7 福祉人材の育成	43
------------------	----

柱3-取組項目8 誰もが参加できる地域活動の推進	45
--------------------------	----

柱3-取組項目9 多様なはたらく機会の拡充	47
-----------------------	----

4 計画の評価	49
---------	----

第6次地域福祉活動計画の策定に寄せて	50
--------------------	----

資料	(掲載予定 ※案には付いていません)
----	--------------------

新しい時代の扉を開く地域福祉活動計画に期待する

立教大学コミュニティ福祉学部 飯村史恵

「ひとりの不幸も見逃さない～つながりのある地域をつくる～」という理念を掲げて実践を重ねてきた練馬区社会福祉協議会の活動計画も、第6期を迎えることとなりました。この間さまざまな情勢変化がありましたが、近年、最も社会福祉活動に影響を及ぼしたのは、何と云っても新型コロナウイルス感染症の世界的流行と、それに伴う数々の規制や「自粛」ムードの広がり、何と云っても他者とコミュニケーションを図るといった大事な機会を喪失／縮小せざるを得なかったことでしょう。この問題は、今後も社会の多方面に、思いもしない影響を与え続けて行くような予感がしています。

感染症には多数のリスクがあり、その最たるものが健康被害であることは言うまでもありません。それを最小限に抑制するための行動制限やマスク着用、ワクチン接種等は、日本社会では殆ど議論の余地なく受け入れられ、一方で、その中でも働き続けなければならないエッセンシャル・ワーカーの人々に、私たちがこれほどまでに支えられてきたのかという見えにくい社会の構図も浮き彫りにしました。

このような中で、どのような状況にある人々でも、安心して地域における日常生活を送ることができるよう今後の社会福祉協議会の活動は、相当の覚悟を持って変えていかなければならない時期にあると見受けられます。

話は変わりますが、岩手県と秋田県の県境に、かつて沢内村という小さな村がありました。沢内村は、日本で初めて老人医療費や乳幼児医療費を無料化した「生命尊重の村」として有名ですが、長らく無医村で乳幼児死亡率も高く、豪雪・多死・貧困という厳しい環境に置かれていました。こうした村を地域医療・保健・福祉の先進地に導いたのは、優れた村長や専門職の存在もありましたが、注目されるのは「三せい運動」を実践し続けた地域住民の存在でした。「三せい運動」とは、一人ひとりが「せい」、みんなで「せい」、話し合っ「せい」という、地域住民が個人の主体的な行動をしつつ、地域メンバーで協力しあい、そのために話し合いを重視するという「住民主体」を地で行く運動でした。

練馬区社協におけるネリーズや、今回の活動計画で取り上げられている多様な団体の活動は、こうしたかつて岩手県の小さな村で営まれた「三せい運動」を思い起こさせる一面があります。

もちろん、沢内村と現在の練馬区では、地域状況も、時代状況も、環境も大きく異なっています。練馬区は大都会東京にあって、自然環境にも恵まれ、何より多くの情報を活用できる多彩な人材が集う場でもあります。こうした練馬らしさを活かして、新たな時代の扉を開く鍵が今回の地域福祉活動計画であり、この計画を進めながら、より多くの人々の参加と協議によって内容が熟成され、実りある主体的な地域福祉活動に育っていくことを願っています。

第1章

計画の策定にあたって

1 策定の目的・基本理念

地域福祉活動計画とは、「社会福祉協議会が呼びかけて、住民、地域において社会福祉に関する活動を行う者、社会福祉を目的とする事業（福祉サービス）を経営する者が相互協力して策定する、地域福祉の推進を目的とした民間の活動・行動計画」です。

この計画は、生活環境が変化したり、支援が必要になっても、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるよう、私たちが取り組む地域課題と目指す将来像を示しています。いわば、私たち一人ひとりが、どのように地域づくりを進めていくかを確認し合うための計画です。

練馬区地域福祉活動計画は、練馬区社会福祉協議会（以下「練馬区社協」という。）の法人理念でもある「ひとりの不幸も見逃さない～つながりのある地域をつくる～」を基本理念に掲げ、区民、民生・児童委員、町会・自治会、社会福祉法人、社会福祉施設・団体、事業所、企業、行政、学校などと協力しながら、地域の福祉力を活性化させ、誰もが暮らしやすい地域社会を目指します。

2 これまでの経緯

練馬区社協では、平成7年に第1次地域福祉活動計画を策定し、地域社会を取り巻く環境の変化を踏まえ、第5次計画まで進めてきました。社会福祉協議会は、住民主体の考えのもと、運営される団体であり、地域住民や当事者団体の参加と代弁を図る組織です。したがって、地域の声を聴き、その声を反映しながら計画を策定する作業や過程そのものが、練馬区社協の事業展開において重要な位置を占めるものとなりました。

地域福祉活動計画策定・推進評価委員会を中心に、これまで地域を支えてきた地域住民や関係団体との地道な協働を大切に、これからも地域福祉を共に考え、行動していきます。

計画	計画期間
第1次地域福祉活動計画	平成7年度～平成12年度（6か年）
第2次地域福祉活動計画	平成18年度～平成22年度（5か年）
第3次地域福祉活動計画	平成23年度～平成26年度（4か年）
第4次地域福祉活動計画	平成27年度～令和元年度（5か年）
第5次地域福祉活動計画	令和2年度～令和6年度（5か年）

3 練馬区との連携

練馬区社協と練馬区は、互いに地域福祉を推進するパートナーです。

練馬区社協では、成年後見制度の利用を促進する「中核機関」業務、重層的支援体制整備事業や生活困窮者自立相談支援事業等を練馬区から受託しています。

また、練馬区は、練馬区社協が取り組むボランティア育成事業や地域活動団体のネットワーク化事業などの活動を支援し、連携を図っています。

これら事業と同様、民間の活動・行動計画である「地域福祉活動計画」と練馬区が策定する行政計画「練馬区地域福祉計画」は地域福祉を支える両輪として区全体の地域福祉を推進します。



4 効果的な情報発信

これまでのとおり「計画書本編」と「概要版」を作成し、第6次計画の周知に努めます。

また、第6次計画では、地域福祉活動計画策定・推進評価委員の意見を受け、困りごとが生じたときに計画書を通じて情報にアクセスできたり、相談窓口が見つかるリンク機能を電子版（練馬区社協ホームページに掲載）に備えます。

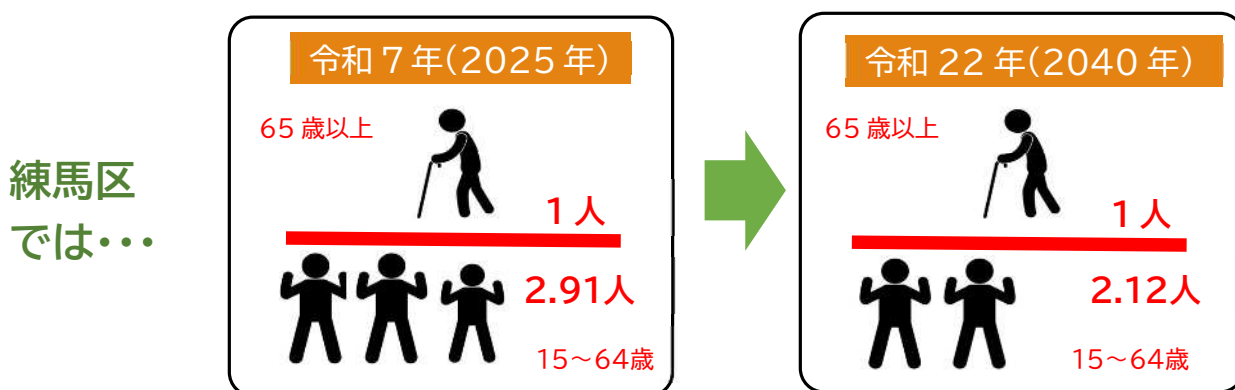
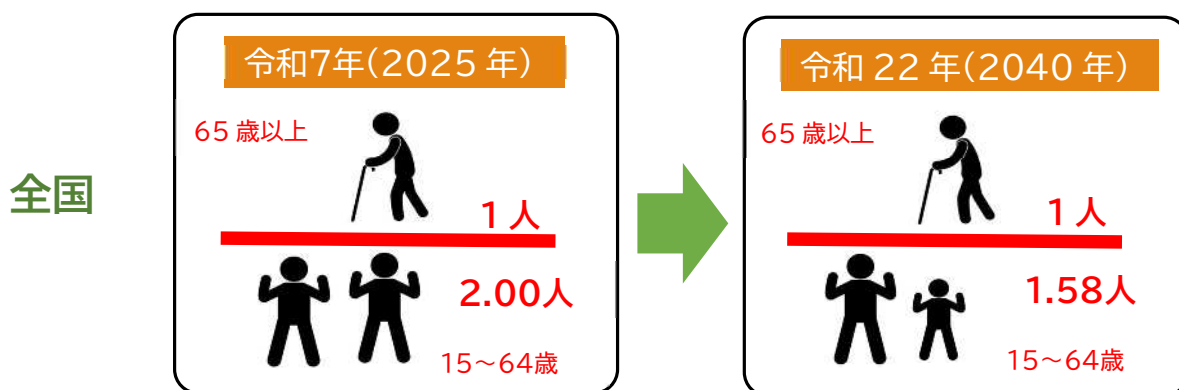
さらに、日頃から地域福祉に興味や関心を持ってもらえるよう、SNSを活用した効果的な情報発信に取り組みます。

第2章

練馬区を取り巻く状況

1 地域社会の担い手の変化

「団塊の世代ジュニア」が65歳以上に到達する令和22年(2040年)には、図のように1.58人の生産年齢人口で1人の高齢者を支えるようになる「現役世代の急激な減少」が顕著となります。このような人口動態は、練馬区でも同様です。地域に「担い手」が不足していくという課題を次世代の負担に追わせることなく、どのように乗り越えていけるかが問われています。



国立社会保障・人口問題研究所による令和5年推計から作成

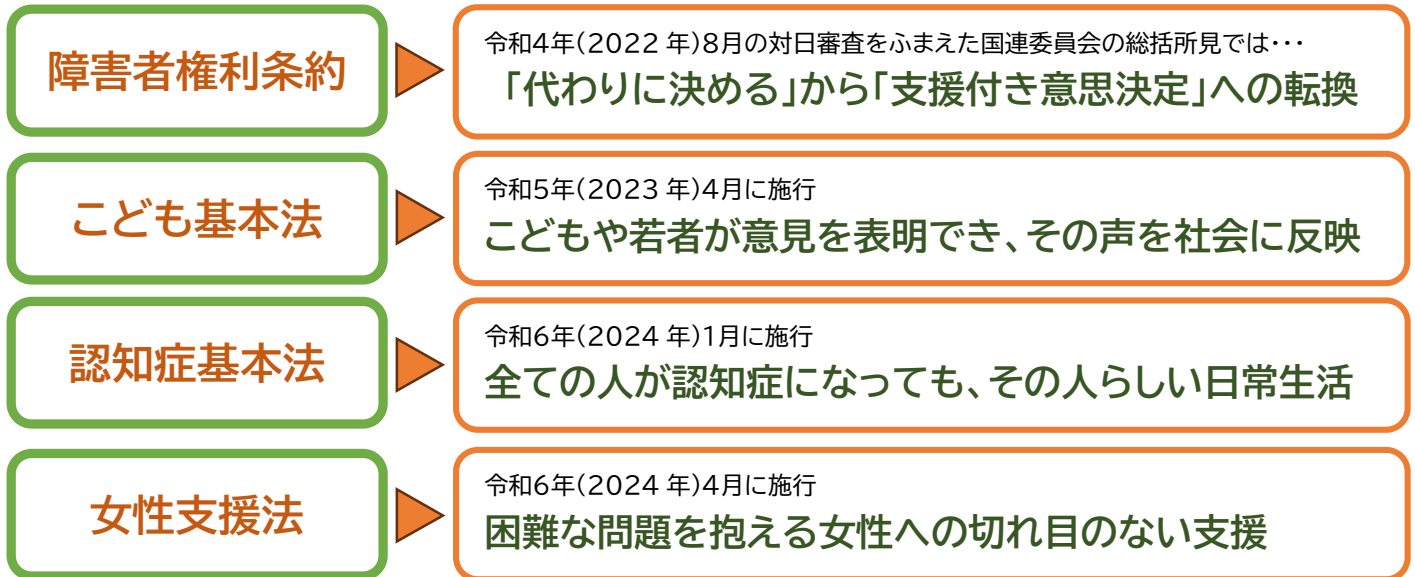
2 誰もが支え合う「地域共生社会」～受け手と支え手の関係を超えて～

国連が目指すSDGsを子ども・若者世代が学校教育において積極的に学んでいます。その理念は、人は生まれながらに誰かを支え、誰かに支えられる存在である「地域共生社会」の目指すものと一致しており、練馬区社協の地域福祉活動計画が掲げ続ける基本理念である「ひとりの不幸も見逃さない」に通じるものです。



3 「権利擁護支援」と地域共生社会の推進

権利侵害の回復にとどまらず、本人自身が権利行使できることへの支援、地域で共生をすすめるための理解を広げる「権利擁護支援」が重要になっています。今後はさらに、身寄りのない高齢者への支援、成年後見制度の見直しや社会福祉法の改正などの施策動向も想定されます。

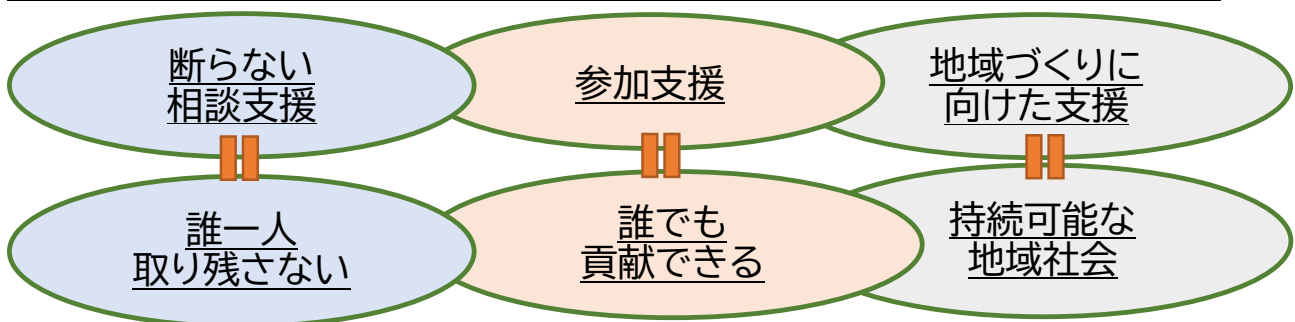


4 重層的支援体制整備事業～複雑化・複合化した課題への対応～

制度のはざまに陥りがちな複雑化・複合化した課題に対応していくため、国の新しい重層的支援体制整備事業が令和3年度(2021年度)から始まりました。人と人とのつながりそのものがセーフティネットの基盤になることから、抱えている課題を解決するとともに本人と地域社会との関わりづくりを重視した事業です。練馬区でも令和5年度(2023年度)からこの事業の移行準備事業に取り組み、ひきこもり等のサポートをはじめとした支援を強化しています。

重層的支援体制整備事業

包括的相談支援事業	既存の分野別の相談機関の連携を強化
地域づくり事業	既存の分野別の地域づくり事業の連携を強化
新たな事業	・参加支援事業 ・アウトリーチ等を通じた継続的支援事業 ・多機関協働事業



5 「コロナ禍に顕在化した地域課題」と新たな地域活動

令和2年(2020年)1月に新型コロナウイルスの初めての感染者が国内で確認されて以降、コロナ禍が社会全体の活動を大きく制約しました。図の4つの地域課題がコロナ禍に顕在化し、練馬区社協でもそれらの課題に対応した取り組みを行う中で、新たな地域活動も生まれました。

<コロナ禍に顕在化した4つの地域課題>

課題1

コロナ禍の日常生活の長期にわたる変化に伴う高齢者、障害者、子どもたちへの影響

練馬区社協でも…

- *外出の機会が減った高齢者の健康維持に影響を与えた。
- *子どもたちにとっての大切な体験の機会が失われた。
- *障害のある人にとって地域との交流機会が失われた。
- *福祉施設の利用者と地域が関わってきた行事の多くが中止。

課題2

これまでは把握されていなかったが、コロナ禍で顕在化した新たな地域課題

練馬区社協でも…

- *3万5千件を超える「新型コロナにかかる特例貸付」の申請を受け付け、生活困窮の実情が浮かび上がった。
- *生活困窮者自立相談支援事業の相談は前年度の4倍に増加。ギリギリで生活していた世帯の課題が顕在化。
- *閉塞感が広がる中、DVや虐待の問題が深刻化した。
- *相談につながりにくい方が地域に多くいることが顕在化。

課題3

地域活動の担い手と今後の活動の在り方への影響

練馬区社協でも…

- *行事やイベントの中止により地域のつながりが失われた。
- *長年、地域で活動してきた団体が活動をやめてしまった。
- *小中高生のボランティアや施設での体験機会が途切れた。
- *一方、地域に関心をもつ若者も増え、フードライブや若者らしい新しい視点での実践も生まれている。

課題4

情報格差への対応

練馬区社協でも…

- *デジタル化がすすむ一方、デジタルスキルに世代間の格差。
- *外国籍居住者への制度に関する情報支援が課題となった。

コロナ禍に顕在化した地域課題に対応していくため、地域でできそうなことを大学生たちで出し合っていたときのこと。「修学旅行のやり直しをしてみる」という意見が出てきました。こども・若者にとって、3年間というコロナ禍にできなかったことには、「その時にしかできなかったこと」があったということを改めて感じさせられました。きっと、この世代は、地域で暮らす一人ひとりの中にある、あいまいなまに失われてしまったものに寄り添える世代に育っていくんだろうなと思います。次世代が活躍できる第6次計画となっていくことを期待します。

森 純一（東京都社会福祉協議会）

第3章

第5次地域福祉活動計画の 振り返り

1 計画が目指したもの

令和2年度(2020年度)～令和6年度(2024年度)の第5次地域福祉活動計画を策定するにあたっては、その前期の第4次計画の取り組みを振り返り、「ネリーズ」「キーパーソン」「地域福祉コーディネーター」の取り組みを更に推進することで、以下の3つを強化していくことを目指しました。

第5次地域福祉活動計画で強化を目指した3つのポイント

- (1)地域の「気づき」を共有するだけでなく、それを広く発信していく。
- (2)地域福祉コーディネーターは、「生きづらさ」を地域の課題としてとらえるため、地域で身近に自発的な活動を行っている「キーパーソン」とのつながりを強化していく。
- (3)第4次計画で芽吹いた「ネリーズ」や「社会福祉法人等のネット」を生かし、地域住民から専門機関までが練馬らしい地域づくりを進めていく。

2 成果と課題

第5次計画では、2つの柱(「つながり支えあう地域をつくる」と「それぞれの生き方を支えあう」)を設定しました。特に柱2は個の尊厳の視点を強化した柱です。こうした柱を設定してスタートした計画ですが、計画の初年度からコロナ禍に見舞われ、地域では人と接する機会が減り、地域活動も停滞しました。その一方で、誰もが当事者となったコロナ禍は、誰もが「支えあう」ことの大切さに気づかされ、地域共生社会はどんな状況でも揺るがないことが再認識されました。また、特例貸付をはじめ社協に寄せられる相談が増加したことから、これまでは十分に見えなかった地域課題が見えてきたり、社協と関わりが少なかった様々な人の暮らしを知る機会になりました。

第5次計画の取り組みを通じて、以下のよう
に、主な成果と課題がみられました。



柱1 つながり支えあう地域をつくる

(1) 住民主体の地域づくり

- (取り組み内容)・誰もが参加できる地域活動を推進する
- ・ネリーズの気づきの輪を広げ発信力を高める
 - ・地域に暮らすキーパーソンの力を地域づくりにつなげる
 - ・災害に備えた地域の関係づくり

成果	課題
<p>①「地域福祉実践報告会」をコロナ禍も継続し、地域団体同士のつながりを広げた。</p> <p>②コロナ禍でも社協が運営する作業所、地域生活支援センターでは利用者が地域住民と関わる活動ができる範囲で続けた。</p> <p>③ネリーズ懇談会を「多様性を認め合う」などをテーマに継続的に開催した。</p> <p>④地域に暮らし身近に自発的な活動を実践する「キーパーソン」の事例を集積し、四コマ漫画等で表現した。身近にネリーズのような気づきが共有されると新しい活動が始まっており、ネリーズとキーパーソンはその機能が重なり合うことが分かった。</p> <p>⑤災害シンポジウムや入門講座を通じて地域住民や関係団体のつながりを広げた。</p>	<p>①就労する高齢者も増え、若い世代も含め仕事をしていても参加しやすい活動が求められてくる。「誰もが参加できる」地域活動の在り方に新しい工夫が必要となる。</p> <p>②多様な地域課題をさらに広く地域住民に分かりやすく発信することが必要となる。</p> <p>③ネリーズ通信を発行し続けたが、ネリーズ以外への発信やネリーズ自身による発信を強化するなど、発信力を高めていくことが期待される。</p>

ネリーズ (地域福祉協働推進員)

733人 (令和6年12月現在)
5年間で、懇談会を11回開催
ネリーズ通信を第33号まで発行



社会福祉法人等のネットワーク

区内 65 法人 100 か所を超える事業所が参加

活動テーマ

= 「就労体験」「交流の場・居場所づくり」「福祉教育」

(2) 分野を超えたネットワークの構築

- (取り組み内容)・社会福祉法人等のネットワークを活用した仕組みづくり
 ・地域課題を共有できるネットワークづくり
 ・地縁組織や地域のさまざまな活動の連携を深める

成果	課題
①社会福祉法人等のネットワークでは、「ネリーズと同じ4つのエリアごとの取組みを進めた。全体会には、各地区の民生委員が出席して法人と情報交換した。 ②生活困窮者の相談から見える課題を民生委員と共有したほか、ボランティアセンターに相談のあった「発達性読み書き障害」の事例をもとに、その課題を知ってもらうプロジェクトを展開するなど、社協の各事業で相談を重視した活動を展開した。(17・18 ページ参照) ③民生委員や施設職員と連携し、コロナ禍に外出できない世帯の食料支援などに取り組んだ。	①地域課題をさらに地域住民に知ってもらう取組みを広げていくことが必要となる。 ②地域福祉コーディネーター、社会福祉法人等のネットワーク、ネリーズが地域にある課題を共有し、連携を進めていくことが期待される。

柱2 それぞれの生き方を支えあう

(1) まるごと認め支え合う仕組みの構築

- (取り組み内容)・複合的な課題への対応・はざまの支援
 ・生活・就労の一体的支援

成果	課題
①当事者同士が「本人の望む生活・はたらき方」を語り合い、多様な価値観があるということ当事者から学ぶ視点で確認することができた。 ②孤立や課題を早期に発見するため、各拠点における相談事例を共有したほか、第6次計画に向けて地域福祉活動団体にインタビューを実施した。 ③食料支援の展開を通じて、複合的な課題に対応する関係機関の連携を強化した。 ④外国人支援等のためのNGOや専門機関との連携など、福祉に限らない分野との連携に取り組んだ。	①本人の望む多様なはたらき方を当事者の視点で広く発信する機会を広げることで地域からの理解を深め、地域で支える参加支援に結びつけていくことが必要となる。 ②複合的な課題を早期に把握し本人主体による課題解決や地域の理解へと進めるため、ネリーズや社会福祉法人のネットワーク等の関わりを強化していく必要がある。 ③公的機関に限らない多機関協働やインフォーマルな活動とフォーマルな取組みの連携を作り上げていくことが必要となる。



(2) 権利擁護の視点をもった地域生活支援の推進
 (取り組み内容)・当事者の力を活かした福祉教育
 ・福祉人材の育成
 ・その人らしい地域生活を支える

成果	課題
<p>①社協の運営する福祉作業所や地域生活支援センターでは、学校や地域と連携し、当事者自身が語ることを通じて障害を理解してもらい取り組みをコロナ禍も続けた。</p> <p>②学校の授業や講座に限らず、農園などの場で利用者と地域の人と一緒に作業するような場を通じて、当事者の力を活かした福祉教育を幅広い視点で進めた。</p> <p>③障害福祉人材育成・研修センターを事業団へ移管したが、同センターで当事者の声も踏まえて作り上げた「目指すべき人物像」を社協内部での研修に引き継いだ。</p> <p>④その人らしい地域生活を送ることができるよう、成年後見制度をはじめとした権利擁護の必要性を検討する仕組みづくりや市民後見人の養成を進めてきた。</p>	<p>①当事者の力を活かした福祉教育を社会福祉法人等のネットワークやネリーズと連携し、幅広く学校と推進していくことが期待される。</p> <p>②権利擁護支援について話し合う検討支援会議の仕組みと重層的支援体制整備事業を活用した他機関協働の仕組みが連携し、その人らしい地域生活を支える体制を強化することが必要となる。</p> <p>③権利擁護の視点を持った取り組みをその人らしい地域生活を支える様々な事業やネットワークと共有していく必要がある。</p>

これらの成果や課題から、「それぞれの生き方を認め支え合う」「つながり支え合う地域をつくる」ことは引き続き強化すべき重要な取り組みの柱と考えられます。なお、地域にある課題に対して地域住民が自発的に動く(=「キーパーソン」の機能)機会を増やしていくうえで、「ネリーズ」の気づきの広がりも重要になります。第6次計画では、「ネリーズ」「社会福祉法人等のネットワーク」「地域福祉コーディネーター」を計画の「推進力」とし、以下を強化していくことが求められます。

第6次地域福祉活動計画に向けて

- (1) その人らしい生き方を認め合い、つながりのある地域づくりとともに、誰もが参加して活躍できる地域づくりを進めていく。
- (2) 地域の課題を3つの推進力を生かして、広く地域住民に発信していく力を高める。
- (3) 当事者の力を活かした権利擁護支援の視点を様々な場で展開していく。

地域福祉コーディネーターの実践～気づき・つなぎ・広げる～

地域福祉コーディネーターには障害の有無や年齢、性別、国籍等に関係なく、さまざまな相談が寄せられます。「ひとりの不幸も見逃さない～つながりのある地域をつくる～」ために、地域福祉コーディネーターは、一つひとつの相談を受け止め、できることから参加の輪を広げ、支え合いの地域づくりに取り組んでいます。ここでは、地域の方の相談をきっかけに、発達障害のある方や家族、地域で支援をしている団体等による活動が共感者を呼び、そしてあるプロジェクトが生まれた実践例をご紹介します。

はじまりは一本の電話から



平成 30 年、練馬区社協にかかってきた 1 本の電話は、区内に住む一人のお母さんからのものでした。発達性読み書き障害がある中学生のお子さんのために、教科書のルビ振りをボランティアにお願いしたいという相談でした。地域福祉コーディネーターはボランティアの協力を得て、ルビを振ることができました。でもそれだけで、お母さんの悩みが解決したようには見えませんでした。

そこでまずは、この障害のことをもっと知るために、地域福祉コーディネーターが中心となって小さな勉強会を開催しました。勉強会の終了後の会場では、そこで出会った同じ障害のある子どもを持つ保護者の皆さんがずっと話を続けていました。

出会えた仲間たち

出会った保護者の皆さんが「もっと情報交換がしたい」と言い、できたのが、『えるでい～学習障害について考える会』です。情報交換の場は、次第に同じ悩みを持つ保護者の皆さんが悩みを打ち明け、励まし合える大切な場へとなっていきました。ただ毎回、会の最後には「もっと多くの人がこの障害のことを知ってくれたらいいのに…」という深いため息が出ていました。



『えるでい』には、これまでのべ 600 人以上が参加しました

応援団が見つかった！



そんなある日、東京練馬中央ロータリークラブ（国際的な社会奉仕連合団体）から地域福祉コーディネーターに、「練馬で困っていることはありませんか。できることがあれば一緒に取り組みたいです」と相談が入りました。そこで『えるでい』の皆さんの悩みを伝えたところ、「一緒にこのことを広めていきましょう」とプロジェクトを立ち上げることになりました。

※発達性読み書き障害（ディスレクシア）とは

学習障害の一種で、知的発達に遅れはないものの、「読む」「書く」ことに困難が見られる障害です。小学校では 1 クラスに 2～3 人そうした子どもがいると報告されています。



「地域で発達性読み書き障害の理解を深めるプロジェクト」 スタート

令和2年から始まったプロジェクト企画は、コロナ禍で変更を余儀なくされながらも進み続け、令和4年から本格的に実施しました。

プロジェクトで取り組んだこと

- ◆ 『発達性読み書き障害早わかりガイド』
3000部発行
区内の全小中学校、関係機関に配布
- ◆ シンポジウム×2回 のべ1000人が参加。
- ◆ YouTube版『発達性読み書き障害早わかりガイド』を配信。2万回再生（令和6年10月現在）
- ◆ 当事者でもある落語家を招いての講演会 461人が参加



シンポジウム参加者の声

人生のステージごとに困りごとが変わると聞いて、自分に何が出来るか分からないけれど、良き伴走者になりたい。

もっと早くこの障害のことを知っていたら、違う対応ができていたかもしれません。世の中全ての人に聞いて欲しい内容です。

マンガを含む冊子の発行や動画の作成、YouTubeでのシンポジウムのライブ配信など、地域福祉コーディネーターにとっても慣れないチャレンジが数多くありました。それでも諦めずに、多くのボランティアや団体、機関、企業など様々な立場の地域の方に相談をしてみたところ「一緒に考えよう！」という皆さんが集まり、プロジェクトのメンバーが増えていきました。



第2回シンポジウムの様子



広がりは止まらない

地域福祉コーディネーターのもとには、現在も全国の自治体や社協から、そして同じ悩みを持つ親御さんからも「地域で冊子を紹介したい」「同じような取り組みをしたい」と問合せが入るようになりました。1本の電話から始まったプロジェクトが、たくさんの人をつなげながら、練馬を飛び出して全国から反響を得ています。

今回の取り組みによって、練馬区の子どもたちの学習環境は少しだけ変化してきています。関わったお子さんは今では成人しました。今後は就労の場面などより広い範囲で社会との関わりが必要です。第6次計画でも引き続き、発達障害の支援を行っている団体や関係機関等と連携しながら、更に理解者が増えるよう取り組みを広げていきます。

このように、地域福祉コーディネーターは個別の困りごととも地域全体の課題と捉え、住民のみなさんとともに解決につなげる取り組みを行っています。身近にある困りごとについて、地域福祉コーディネーターと一緒に考えて行きましょう。



PDF 版冊子



YouTube 動画

ダウンロードはこちらから

第4章

第6次地域福祉活動計画

1 計画の理念

練馬区社協は、地域福祉のネットワークを構築し、誰もが住み慣れた地域で安心して生活することができるような取り組みを進めてきました。しかし、第5次計画の推進期間においては、新型コロナウイルス感染症の流行の災禍に見舞われ、地域福祉を推進する方法を見直さざるを得ない状況がありました。練馬区社協では生活に困窮する多くの方から相談が寄せられ、特例貸付や住居確保給付金等の対応に追われました。その渦中において、コロナ禍前には想定できていなかった、支援を必要としている方が地域に多く存在している状況への気づきとなり、社会福祉協議会として地域課題を十分に認識できていたかどうか考えることを余儀なくされました。

また、新型コロナウイルス感染症のまん延防止による外出抑制が重なり、人と人とのつながりについて希薄化が進みました。このことは住民参加を活動の基盤としている練馬区社協にとっても大きな打撃となりました。一方で顔の見える関係の価値を再認識することにもつながり、若い世代の社会的課題への関心の高まりも見られています。

コロナ禍を経て、今一度住民を主体とし、顕在化された地域課題に対応していくため、第6次計画では引き続き「ひとりの不幸も見逃さない～つながりのある地域をつくる～」を理念に掲げ、取り組みを進めていきます。

2 計画の柱

柱1 認め合う 一人ひとりの生き方を認め支え合う

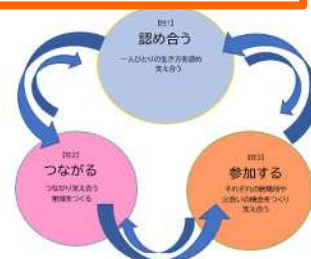
新型コロナウイルス感染症の影響による経済的な困窮をはじめ、8050 問題に代表される複雑化・複合化する生活課題に直面しています。一人ひとりの尊厳を確保し、地域で安心して暮らせるよう、包括的に相談を受け止めていく仕組みの構築が必要です。また、権利擁護の視点を持って一人ひとりの生き方を認め支え合える個々の地域生活を支援していきます。

柱2 つながる つながり支え合う地域をつくる

コロナ禍においては人と接する機会や地域活動が停滞し、社会との関係が薄れてしまった人や活動規模を縮小した団体がありました。人と地域が結びつき、互いに支え合う地域をつくるために地域福祉コーディネーターが関係機関、地域活動団体、社会福祉法人等とネットワークを築き地域を網の目のように包みながら、つながり支え合う地域づくりに取り組みます。

柱3 参加する それぞれの居場所や出会いの機会をつくり支え合う

一人ひとりの尊厳の確保やつながりのある地域づくりを進めるためには、多くの人の参加のための土壌づくりが必要と考えられ、それぞれの居場所や出会いの機会をつくっていきます。



3 3つの推進力

「ネリーズ」「ねりま社会福祉法人等のネット」「地域福祉コーディネーター」は、「ひとりの不幸も見逃さない～つながりのある地域をつくる～」ことを目指し、計画に沿ってこれまでも活動してきました。第6次計画では、これらを地域福祉活動計画の「3つの推進力」と位置づけ、地域福祉の更なる取り組みを進めます。

「ネリーズ」

日々の暮らしの中で、近隣の方たちとつながっていくことで、ゆるやかに見守り合い、誰にとっても暮らしやすい地域づくりを目指している地域のみなさん。「ネリーズ」は、地域福祉協働推進員の愛称。

日頃何気なく行っていることや、すでに取り組んでいる活動で十分です。ネリーズは共感の輪を広げ、それぞれの立場の中でやさしく見守りあうことで、誰にとっても暮らしやすい地域づくりを目指します。

地域づくりに関わることは、決してハードルが高いことではありません。地域のために何かしたいと考えて、解決につなげようとする方はもちろん、暮らしやすい地域をつくりたいという思い(ネリーズマインド)を持っている方もみなネリーズです。

「ねりま社会福祉法人等のネット」

区内の社会福祉法人等が中心になり、それぞれの強みを生かして、地域福祉を推進していくために立ち上がったネットワーク。

区内には、65の社会福祉法人が運営する100か所を超える高齢者、障害者、子どもたちのための福祉施設があります。社会福祉法人等のネットでは、それぞれの専門性を生かし協力、連携して地域への貢献や、地域課題の解決に向けて取り組んでいます。これまで「就労体験」「交流の場・居場所づくり」「福祉教育」を取組項目として掲げ、地域の特性を生かしながら様々な取り組みをしてきました。

社会福祉法人等のネットの「等」には社会福祉法人に加えて、民生児童委員協議会やNPO、地域活動団体など多様な主体とも連携をしていく、という意味が込められています。複合化する生活課題に対応するためには、多様な主体とも連携し、広く相談を受け止め地域福祉の向上を目指し、ネットワークを拡充していきます。

「地域福祉コーディネーター」

社会福祉協議会の職員。様々な分野の関係機関、団体、地域住民をつなげ、地域課題の共有や解決に取り組む「地域のつなぎ役」。

練馬区社協の職員一人ひとりがその強みを生かして、地域の方や団体の皆さんの主体的な活動を応援します。地域の課題や個別の課題など様々な相談に乗り、取り組みを広げていくために関係機関、団体、地域住民をつなぎます。

ねりま社会福祉法人等のネットやネリーズを「つなぎ」、地域の皆さんとともに地域の課題解決に向けて取り組みます。

理念「ひとりの不幸も見逃さない～つながりのある地域をつくる～」



柱1
認め合う

一人ひとりの
生き方を認め支え合う

柱2
つながる

つながり支え合う
地域をつくる

柱3
参加する

それぞれの居場所や
出会いの機会をつくり
支え合う

第6次地域福祉活動計画の推進力

「ネリーズ」「ねりま社会福祉法人等のネット」「地域福祉コーディネーター」は、「ひとりの不幸も見逃さない～つながりのある地域をつくる～」ことを目指し、計画に沿ってこれまでも活動してきました。第6次計画では、これらを地域福祉活動計画の「3つの推進力」と位置づけ、地域福祉の更なる取り組みを進めます。



ネリーズ



日々の暮らしの中で、近隣の方たちとつながっていくことで、ゆるやかに見守り合い、誰にとっても暮らしやすい地域づくりを目指している地域のみなさん。「ネリーズ」は、地域福祉協働推進員の愛称。

ねりま社会福祉法人等のネット

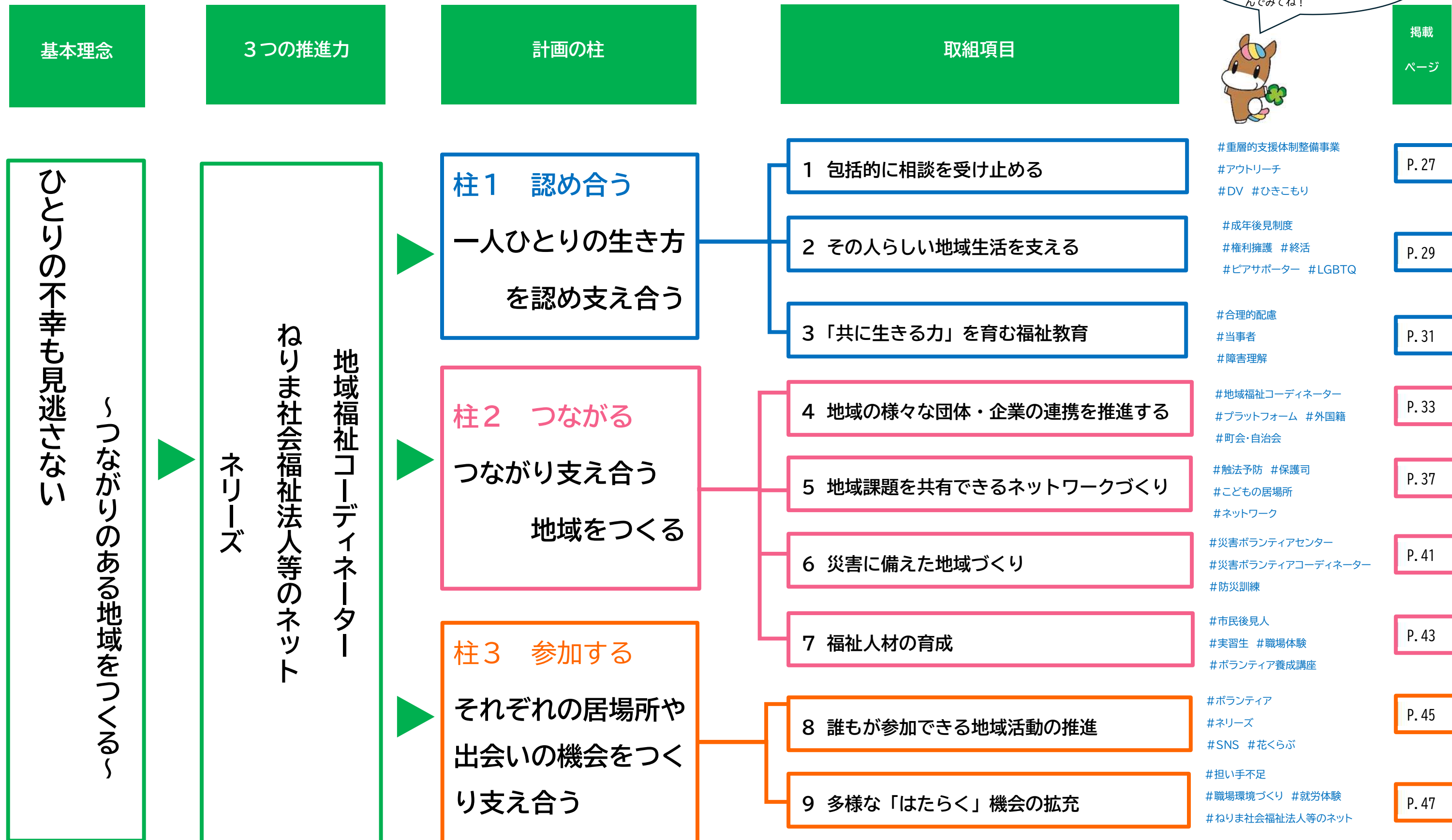


区内の社会福祉法人等が中心になり、それぞれの強みを生かして地域福祉を推進していくために立ち上がったネットワーク。

地域福祉コーディネーター



社会福祉協議会の職員。様々な分野の関係機関、団体、地域住民をつなげ、地域課題の共有や解決に取り組む「地域のつなぎ役」。



包括的に相談を受け止める

現状と課題

- ・世帯の単身化の進行や町会・自治会といった地縁を基盤としたつながりが希薄になる中、8050問題やDV、虐待、子どもの自殺の増加など「孤立」の問題が深刻になっています。
- ・困難を抱える人や家族が孤立の中から地域や支援者につながるためには、分野別の相談窓口を開設しているだけでは不十分です。困っている人に早期に出会うための取り組みが求められています。
- ・複合化した困りごとを解きほぐし解決を図っていくことは簡単ではありません。困難を抱える人の意欲や想いを最大限尊重しながら、継続的に関わりを持ち（伴走支援）、横でつながった地域や関係機関がチームで支援していく必要があります。

地域での取り組み

- ・地域に関心を向け、自分の生活範囲の中で顔が見える関係づくりを心がけます。
- ・ネリーズに登録し、ネリーズ通信やネリーズ交流会を通じて、他のネリーズから地域活動のヒントを得たり、自身が心がけて取り組んでいることを発信します。
- ・困っている人や心配な様子の人がいたら声をかけてみたり、地域の相談役や近くの練馬区社協の拠点などに相談します。
- ・民生・児童委員や保護司会をはじめ、特定の目的を持って活動している団体などは、活動を通して見守りを行い、状況に応じて相談窓口につながります。困っている人が不安を感じている場合は相談窓口事前に電話したり、一緒に行くなど安心できるように提案します。

練馬区社協の取り組み

- ・福祉の総合的な窓口として相談を受け止め、相談した人が安心できるよう丁寧に対応します。適切な相談対応ができるよう研修等を充実させ、相談対応の強化を図ります。
- ・練馬区から受託している「重層的支援体制整備事業」では、地域福祉コーディネーターが、地域に出向いて相談を受け止め（アウトリーチ）、相談者に寄り添った継続的な支援の充実に取り組みます。
- ・練馬区社協の拠点やねりま社会福祉法人等のネットとのつながりを生かし、関係機関や地域住民（ネリーズ）と連携を深め、既存の制度では対応できない複合的な課題に対応します。



地域でこんな取り組みが広がっています

困っている人を一人にしない

誰もが暮らしやすい地域を願うネリーズ、地域の身近な相談役である民生・児童委員など、地域には様々な力を持つ住民がいます。

また、「ぶどうの木」や「灯火」など、様々な課題に対してグループを作り、活動している団体もあります。公的な相談窓口も含め、そのような人や団体が横につながることによって、孤立が深まる前に周りの人が気づき、解決に向けた応援につながりやすくなります。誰ひとり取り残されることのない地域を目指します。

ネリーズ コンビニエンスストア店長さん

地域の中で何かできないかとお客さんを見守っている温かいコンビニのお話です。

ある時、お客さんの中にお風呂に入れているか心配な方がいました。店長はどうしようかと考え、日頃から関係ができていた障害者地域生活支援センターういんぐのスタッフに相談しました。その後、地域包括支援センターとつながり、その方を一緒に見守っていくことになりました。



民生・児童委員 玉井さん

民生・児童委員は、住民の立場に立った相談・支援者であり、自らも地域住民の一員として担当地域において見守り、声かけ等を行っています。

「地域の住民の皆さんから身近な存在に思ってもらえるよう心がけて活動しています。

困りごとは様々です。声を上げられない人、人との関わりが苦手な方もいます。時間がかかっても丁寧に話を聞き信頼関係づくりをしています。」



ぶどうの木

「ぶどうの木」は、DVや虐待、ハラスメントの被害を経験した方々が集う安心安全な居場所です。毎月自助グループを開催し、個別相談や同行支援、勉強会等必要な支援も行っています。家庭にも、社会にも、暴力は必要ありません。

～代表 森さんからのメッセージ～

「ひとりで悩まないで！大丈夫。ひとりじゃない！同じ苦しみを経験した仲間が待っています。」

～当事者の声～

相談前の気持ち

「私の気持ちは誰にもわかってもらえない、話せない、独りぼっち…孤独でした」

「ぜんぶ自分が悪いと思っていた」

「誰か助けて！といつも心の中で叫んでいました」

ぶどうの木と出会って

「相談をして一人で悩みを抱えこまなくなりました」

「夫から何もできないと言われたけど、私にはできることがある、力があると思えた」

「今は辛い思いをしている人を助けたいと思い活動しています」



灯火

「灯火」は、不登校、ひきこもり、発達障害の家族・当事者を対象として対話交流会や親の会、講演会等を行っています。

～代表 古賀さんからのメッセージ～

「大変だったよね。自分らしくいればいい！扉を開け続け活動をする中で、家族・当事者が出会い、お互いに癒され、生きるのが楽になるようお願いしています。」

～当事者の声～

相談当初の気持ち

「どこに相談したらいいのか、どうしたらいいのかわからなかった」

「世間体、世の中の価値観にしばられていた」

「子(親)の気持ちがわからないので聞いてみたい」

灯火と出会って

「みんな悩んでいることを知り、自分一人ではないと感じました」

「言葉にできなかった感情が仲間の言葉に出会って見えてきた」

「自分の視野が広がりました」



その人らしい地域生活を支える

現状と課題

- ・地域の中には様々な人が暮らしています。障害、LGBTQ、外国籍など様々な理由や状況から偏見や誤解により「自分らしく生きる」ことが困難な状況があります。
- ・住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで可能な限り続けられるよう地域でその人を支える仕組みづくりが必要です。
- ・一人ひとりがその人らしく暮らすためには、制度の充実だけでなく当事者による活動や地域活動の充実が必要です。

地域での取り組み

- ・NPO法人や任意団体、当事者や当事者家族などが、それぞれの視点でその人らしく暮らせる地域をつくるため、子ども食堂やサロン活動等の様々な居場所づくりを行います。
- ・障害がある人のために、必要な医療・福祉サービスや生活状況を整理し、親あるうちに情報を残しておく活動をサポートします。また、親同士の情報交換の場を作ったり、講座、講演会を開催します。
- ・認知症当事者やその家族が認知症を理解し、支え合ってより良い介護ができるよう情報交換の場を作ります。

練馬区社協の取り組み

- ・その人らしい地域生活を送れるよう支援していくために当事者による活動を引き続き支援し広げていきます。
- ・判断能力が低下した人が自分の意志や希望を叶えて安心して生活を送ることができるよう、成年後見制度や地域福祉権利擁護事業などを通じ、関係機関と連携して支援します。
- ・個別の課題から出てきた一つ一つの課題を地域課題として捉え、権利擁護の視点を持ち個人の地域生活を支える仕組みづくりを行います。
- ・人生を最後まで自分らしく生きるために「終活」について一緒に考え支援します。



地域でこんな取り組みが広がっています

地域生活を支える様々な活動

地域住民や当事者、当事者家族、団体などが様々な視点でその人らしい地域生活を支える活動をしています。

Willの会 ～Willノート～

障害がある人の必要な支援や医療、生活状況等をまとめる「Willノート」の作成を、障害がある人のご家族に呼び掛けています。ノートは、誰が見ても分かるように視覚的な工夫をしたり、より良い支援につながるような記載を心掛けています。

また、参加者同士の情報交換や交流は、多様な生き方をお互いに知り、視野を広げる機会となっています。

NPO 法人成年後見推進ネットこれから

～これからノート～

認知症や障害があっても住み慣れた地域で暮らし続けるため、成年後見制度の普及を目指して、相談活動や講演会などを行っています。

また、自身のこれからを見つめ直す「これからノート」の普及活動も行っています。「これからノート」は、本人が意思表示できなくなったときに本人の意向を伝えるツールとなるだけでなく、終活を何から始めたらよいか悩んでいる人にとっては考えるきっかけにもなっています。

きらら・ういんぐの「ピアサポーター」って？

精神科病院に長期入院している人が、退院後地域で自分らしく暮らすイメージを持てるように、同じ地域に住む障害がある人が病院などに行き、自らの経験を話す活動です。入院している人には地域生活をイメージでき、ピアサポーターである当事者は自らの言葉で話す役割を担うことで双方に有意義な活動となっています。

また、「ぴあまっぷ」という情報紙を作成し、同じ障害がある人や関係者へ地域の情報を発信しています。長い間、入院生活をしている人にとっては地域で暮らすための社会資源や生活の様子などを知る機会になっています。

自分の人生を生きたい ～Aさんとの出会いから～

家賃の補助制度を利用したいと生活サポートセンターの窓口に来所されたAさんは、男性として生まれましたが、長年自分自身の性別に対して違和感を抱きつつ生きて来られました。長男だからと両親の気持ちを思い、70歳まで周囲に表明することなく男性として働き続けてきた、でもその区切りとした70歳になった今、これからは女性として生きていきたい、自分らしい生き方を認めてくれるところで働きたいと話すAさんに職員は心を打たれました。税の滞納もあり生活はぎりぎりでしたが、家賃補助制度を利用し、就労サポーターに相談しながらウィッグや女性らしい服装、通称利用を認めてもらえる職場を探しました。

働き始め自分らしく生き生きと輝くAさんの姿は、その人らしい生き方を支える価値を職員に教えてくれました。今は長年の夢、ウエディングフォトを撮るための貯金を始めています。



「共に生きる力」を育む福祉教育

現状と課題

- ・社会的マイノリティであることや言語、文化、習慣等の違いから様々な人権の問題が発生しています。これらのことを「知らない」「分からない」ということが、偏見で相手を捉えてしまい、関係を築くときに壁を作ってしまう。まずは、「知らない」「分からない」ことに目を向け、正しく理解することが大切です。
- ・一人ひとりが自分らしく地域で暮らしていくためには、お互いを思いやり、多様性を尊重することが求められます。
- ・その人らしさを認め合いながら共に生きる社会の実現に向け、障害の有無にかかわらず、双方の建設的な対話からお互いに理解し合い、共に対処案を検討していくことが重要です。(合理的配慮)

地域での取り組み

- ・学校では授業の一環として、障害理解を深める取り組みを行っています。近隣の福祉施設に見学に行ったり、利用者の話を聞いたりするなど交流する機会を作り「共に生きる力」を育みます。
- ・当事者による講演会や交流する機会を増やすことで、多様性を尊重する視点と地域につながりが生まれるよう取り組みます。
- ・多様性の理解促進のため、イベントの開催やSNSを活用した情報提供をしていきます。

練馬区社協の取り組み

- ・地域講座や学校で福祉を学ぶ機会を設ける際には、地域で暮らす障害当事者を講師として共に学び合い、障害理解を深められるよう活動を進めていきます。
- ・学校等での学習の機会だけでなく、イベントやアート作品、SNSなどを通して、住民と一緒に考え、幅広い世代に関心を持ってもらえるよう努めます。
- ・ねりま社会福祉法人等のネットでは、地域に向けた福祉教育に取り組みます。



地域でこんな取り組みが広がっています

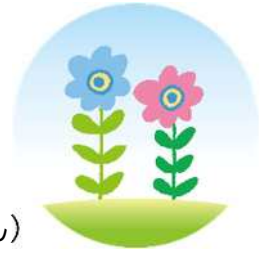
多様性を尊重するつながり

当事者自身がつくる地域のつながり～社会福祉法人練馬山彦福祉会～

山彦作業所では、学校での福祉教育の他に施設のイベントを通じて障害者への理解、活動の周知を行ってきました。小・中学校などの授業での福祉教育も、福祉の分野に関心をもってもらう第一歩としてはとても大切なことだと思います。

しかし、福祉作業所を長く運営している中で、障害者が地域で暮らし、地域との関係を築いていくのは、当事者自身だなと感じることがあります。日常の触れ合いが地域の人とのつながりをつくり、そのつながりを支えていくことが、多様性を育むうえで大切なのだと思います。

(理事長 坂元さん)



体験を通して心をつなぐ楽しい交流事業

～練馬区介護人派遣センター～

障害者のことを地域の人たちにもっと知ってもらいたい、仲間を増やしたいという思いで、車いすの障害者の方と一緒に学校に行って車いす体験を行っています。



子どもたちは障害のある方と早いうちに出会うことで、「壁」をつくらず接しているように思います。子どもたちに車いす体験の授業をすることは、自分たちのことを知ってもらうことなので障害者の方も楽しみながら、やりがいを持って行っています。当事者との体験を通し子どもたちからは「みんなが暮らしやすい社会にするためにどうすればいいか考える機会を持つことができた」「おじちゃん障害があっても話ができないかと思っていただけ、授業を受けて話かけてみたら話が通じた。コミュニケーションができたことに家族も驚いていた」という感想も寄せてもらいました。つながることで、誰でも暮らしやすい地域に近づいていくのだと思います。今後は障害の有無にかかわらず、更に多くの方を巻き込んでこの活動を広げていきたいです。



当事者が講師となって理解を深める

～白百合福祉作業所～

かたくり福祉作業所～

障害理解を深めるために小学生や高校生に当事者が講師となって日々の活動内容や将来の夢などを伝える機会をつくってきました。

また、近隣高校の生徒たちと一緒に、地域の清掃活動や農福連携をしている農園にて除草を行うなどの交流をしています。子どもたちからは、「清掃活動をした時に、手についた落ち葉をとってくれて優しいと思った」「しゃべることができない人でも指差しなどで伝えてくれて、充分コミュニケーションがとれることがわかった」など、当事者と交流を持つことで、多様性を受け入れる地域の力を育むことにつながっています。



地域の住民・団体・企業の連携を推進する

現状と課題

- ・新型コロナウイルス感染症の拡大により、住民活動が止まり、交流やつながりの機会が途切れ、身近な地域の人の顔が見えない状況が生まれました。時代の背景に応じた住民同士の新しい支え合いや誰もが参加できる地域活動の在り方を考えていくことが求められています。
- ・地域福祉活動に参加したい思いを持つ住民や誰かの役に立ちたいという思いを持った団体・企業等が多く存在していますが、そのつながりはまだ不十分です。そのような思いをつなぐ取り組みの必要があります。
- ・コロナ禍により経済が停滞する中で、多くの生活に困った人や外国籍の人が相談窓口を訪れました。多様な暮らし方の尊重や細かい個別ニーズへの対応が求められます。

地域での取り組み

- ・住民は、誰にとっても暮らしやすい地域づくりに向けて、自分にできることを取り組みます。
- ・団体は、子育て、障害、貧困等の対象となる人たちの安心できる居場所としての機能を果たすだけでなく、必要に応じて見守りや相談窓口につなげるなど積極的に活動します。
- ・企業は、SDGs（持続可能な開発目標）やCSR（企業の社会的責任）の観点から、地域に貢献したいという思いを発信し、貧困対策や環境保全等、様々な活動に取り組みます。

練馬区社協の取り組み

- ・地域福祉コーディネーターは積極的に出向く等、地域住民や活動団体との関係性の構築を図るとともに、地域のニーズや強みを把握し、住民のニーズに応じた活動を進めていきます。
- ・住民・団体・企業の「地域のために何かやりたい！誰かの役に立ちたい！」という声を受け止め、活動を支援するとともに、誰もが活動に参加できるよう支援の充実に努めます。
- ・練馬区社協のネットワークを生かし、福祉分野を超えた多様な個人・団体・企業が出会い、対話や交流できる機会（場）を作りながら、住民の自発的な企画・運営のサポートや、地域課題の解決に向けた取り組み等を一緒に考えます。



地域でこんな取り組みが広がっています

地域福祉コーディネーターの実践

～気づき・つなぎ・広げる～

地域をつなぐ連携の推進～北町ネット～



地域福祉コーディネーターに北町地域の住民から、「この地域にどんな人がいて、どんなことをしているか知りたい」と相談が入りました。地域のことを気にかけてくれる、まさにネリーズの一言でした。



地域の社会資源やさまざまな活動を知っている地域福祉コーディネーターは、つながりのある活動団体等に声を掛け交流会を開催し、お互いを知る機会を設けました。
交流会は、福祉作業所の自主製品の活用や傾聴ボランティア活動などの連携につながり、やがて定例会に発展しました。



あるとき定例会で地域で起きている心配事が話題になった時、地域活動団体の方から「北町地域で同じ空気を吸っている人に幸せになってほしい」という発言がありました。参加者はこの発言に共感し、その心配事について一緒に考え、さまざまな意見が出ました。そうしてそのうちに、この場はそれぞれの活動から見える心配事などの話題をみんなで考える場になっていきました。

他の分野の方から意見が聞けて
課題解決に繋がった



毎回、会場やテーマを参加者同士で持ち回りをするなど、参加者が主体的に定例会を展開しています。「異なる分野、業種の人の話を聞くことで視野が広がった」、「自分たちが他にもできることがないか以前より深く考えるようになった」、「日頃から連携しやすくなった」などの反響があり、現在もゆるやかにつながる定例会（北町ネット）は続いています。



顔の見える関係ができて相談しやすくなった。



ゆるやかなつながりの場が地域の複合的な課題を解決するきっかけの場になっています。



思いがつながり大きな力に

募金箱設置で地域貢献

個人・商店・企業・公共機関など、練馬区社協の募金箱設置という形で地域づくりに協力くださっています。集まった募金は、障害者・子ども・高齢者等福祉施設の備品、地域活動の推進のための講座やイベント、相談会などに活用されています。「お互い様の気持ちでみんなで支え合う地域にしたい」「少しでも地域のお役に立つことができれば、できることから始めたい」という思いが地域づくりにつながります。



町会・自治会

障害者地域生活支援センターきらら・ういんぐでは、町会・自治会の方と地域のお祭りや防災訓練を実施したり、地域の花壇整備や町会掲示板ポスター貼りをしています。地域での交流とともに、活動や役割の機会があることで、障害のある人が楽しく、いきいきとした地域生活につながっています。

個人情報保護法やIT化が進み、人と人とのつながりの希薄化や体験格差が大きな問題になっています。「地域社会は子どもたちを育て、社会性をはぐくむゆりかご」町会では若い世代も含め、人と人とのつながりを大切にしながら、お祭りや芋煮会など色々なイベントを通じて、将来を担う子どもたちの創造性や社会性を育てていけたらと思っています。

町会・自治会長の木内さん



練馬区老人クラブ連合会は、昭和36年に発足しました。「さあ！いよいよ・これからだ！！」を合言葉に健康、友愛、奉仕を軸に「音楽健康体操教室」を実施したり、一人暮らしや外出が難しい会員仲間を訪問したり、公園清掃や募金活動などお互いに支えあいながら様々な活動に取り組んでいます。

これまで人とのつながりに恵まれ、困ったことがあったら人に助けてもらい暮らしてきました。受けた恩を直接その方にお返しできないこともあるので他の人に返す“恩送り”をしています。人は人と関わると力がつく実感しています。練馬区には3つの大学があるので、若い世代との交流もしていきたいです。知ること、自分の味方が一杯いることが大切だと思います。「これでいいのだ。」と本人と家族が思える暮らしを目指したいです。

練馬区老人クラブ連合会の岩瀬さん



民生・児童委員は、誰もが地域で安心して暮らせるよう高齢者や障害のある方、子育て中の方などの相談をお受けしたり、区や関係機関とのつなぎ役も担っています。



どんぐりの家

「地域のために！」と練馬区社協に遺贈された一軒家を“地域の居場所にしたい！”と元民生委員や町会と話し合い、ふれあいサロンやこども・おとな食堂・学習支援等、様々な活動が行われる多世代交流の場とし、今では、地域に根付いています。活動を周知しながら、地域づくりをしたい人や若い人と一緒に地域を良くしていきたいです。



勉強に来ていた不登校の子が、勉強ができるようになって面白くなったのか、学校に行くようになり、高校に合格したことが嬉しかったです。一緒に勉強した子が、教える側になってくれるといいなと思っています。

どんぐりの家 運営委員

外国籍の人を対象にした取り組み

コロナ禍で多くの外国籍の人が深刻な生活困窮に陥っていることが分かりました。外国籍の人を支援する団体であるシャンティ国際ボランティア会、東京パブリック法律事務所、練馬区社協の三者が外国籍の人を対象とした相談会・フードパントリーを定期的に開催しています。外国籍の人は生活に困窮した時に社会保障制度の対象外になることが多く、その解決は容易ではありません。弁護士や地域福祉コーディネーターが生活や仕事、在留資格等様々な相談を受け解決方法を一緒に考えています。



地域を支えるスーパーマーケット

スーパーマーケットのピーコック高野台店では、家庭で余っている食品を店内に設置したボックスに集めるフードドライブ活動に取り組んでいます。社員の方の心配りで多くの食料寄付が集まっています。

また、ライフココネリ練馬駅前店では様々な理由で販売はできないけれど品質に問題のない日用品や食材を定期的に練馬区社協へ寄付する活動をしています。

寄付で集まった食品は練馬区社協が定期的に受け取りに行き、生活に困窮している人や地域のこども食堂へ食品をお渡ししています。



地域課題を共有できる ネットワークづくり

現状と課題

- ・地域では様々な個人や自主活動グループが、地域課題解決のために主体的に活動をしています。しかし個々の活動だけでは解決できない複合的な課題に対して、連携・協働できる場づくりが求められています。
- ・福祉制度の充実により、相談・支援の仕組みは、次第に整ってきましたが、相談につながらなかったり、既存の制度だけでは対応が難しいことがあります。住民同士や関係機関が課題を共有し、解決に向けて柔軟に対応できるような地域づくりが必要です。
- ・生きづらさを抱えた人が、孤立や生活困窮、家庭環境等を背景に、法に触れてしまったり、犯罪に巻き込まれてしまうことがあります。関係機関が中心となって、地域で支える仕組みを考えていく必要があります。

地域での取り組み

- ・身近な困りごとを発信し、解決に向けて地域の仲間と一緒に考えます。また、関係機関や練馬区社協につなぐなどして、課題の共有に取り組みます。
- ・活動分野が異なっても、地域の団体同士が、共通する課題に対してゆるやかにつながり、困っている人一人ひとりを共に支え合える仕組みを作ります。

練馬区社協の取り組み

- ・個別の課題を地域課題と捉え、分野を超えて地域住民や関係団体・機関等と連携できる地域のネットワークづくりに取り組みます。
- ・地域での触法予防ネットワークを推進するとともに、練馬区との連携を強化します。
- ・地域福祉コーディネーターが、地域で活動する団体や人々と思いを共有し、誰もが安心して暮らすことのできる地域について一緒に考え、様々な活動の支援を進めます。
- ・ねりま社会福祉法人等のネットや関係団体などと共に、情報交換や連携できる場づくりを強化し、様々な地域課題を解決するための仕組みづくりを進めます。



地域でこんな取り組みが広がっています

住み慣れた地域で暮らし続ける

～ねりま☆共生フォーラム～

生きづらさを抱えた人が法に触れてしまうことや犯罪に巻き込まれてしまうことがあります。その結果、周囲から受け入れられず住み慣れた地域で暮らし続けることができなくなったり、時に加害者として司法の枠組みで裁かれ、地域生活を取り戻す困難さを抱えることがあります。

そのため、練馬区社協では平成 30 年から触法予防について地域で考えることを目的として、勉強会や情報交換を定期的に行ってきました。現在、福祉関係者、保護司、弁護士等の様々な立場の関係者が参加し生きづらさを抱えた人が、地域の理解や適切なサポートの下で地域生活を取り戻せるよう、区内でのネットワーク構築を目指し、活動しています。



相談できる人の幅が広がる。
つながるって大事です！



保護司 石井さん

保護司活動の中で法を犯し更生を目指す人とたくさん出会ってきました。話をしていると、その多くの人が小学校・中学校で必要な知識を得たり、先生や友だちとの関わりを通して社会性を育むことなく、孤立していたことに気づきました。問いをもつ・考える・工夫する・対話する・相談するという経験が圧倒的に不足しているのです。現在は小学校での教員の経験を生かし、地域での学習支援の活動にも取り組んでいます。

保護司や学習支援の活動も続けている限り悩むことはありますが、分野を超えたネットワークを広げていると相談できる人の幅が広がります。ねりま☆共生フォーラムに参加する度に「つながる」ことの大事さを実感しています。

今後はネットワークの線を太くして具体的な問題解決の見通しが地域にも見えるようにできると良いなと思います。

保護司になって 11 年ですが、それ以前から現在に至るまで団地の管理組合や民生・児童委員など、地域活動に取り組んでいます。高齢者の見守り声掛け、少年非行の防止活動、地域包括支援センターとの勉強会など、様々な活動を通じて地域とのつながりを強めていくよう努めています。中には支援を受け入れようとしない人もいますが、地道に続けていると逆に相談されることも増えてきました。

保護司活動で一番残念に思うのは、保護観察が終了してすぐに再犯してしまう方がいることです。依存症など病気を抱える方が多いのも一因ですが、保護観察中にもその兆しを感じることもありますので、保護観察終了後も継続的なフォローをすることが大事なのかと思います。ねりま☆共生フォーラムで色々な立場の方と出会えましたし何かと勉強になりました。今後とも間口を広げ地域とつながっていきたいです。



新しい情報をキャッチできる
場所は貴重です！ 保護司 二葉さん

更生保護を支える人たち

更生保護は国の機関だけではなく、地域の様々な方の理解と協力が不可欠です。

保護司（保護観察官と共に立ち直りを支える民間ボランティア）や民間の更生保護施設、青年ボランティア団体、協力雇用主（雇用を通じて、自立や社会復帰に協力する民間の事業主）など、地域で支える活動の広がりが必要とされています。

再犯防止推進計画

犯罪をした人が抱える課題を社会全体で解消することで、その立ち直りを支援し、犯罪や非行の繰り返しをなくしていく再犯防止の取組が求められています。国が策定した再犯防止推進計画にもとづき都道府県、市区町村単位での計画策定が進められています。練馬区は令和 7 年度からの地域福祉計画に含める形で策定されます。

～ネットワークでつながり、広がる～



は、団体のこんな声から
生まれました！



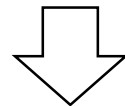
子どもが自分で行ける範囲に色々な居場所がもっとあればいいな。



居場所を必要としている子どもや保護者にもっと情報を届けたいな。



1団体の力だけでは、複雑な事情を抱える子どもの課題を解決することが難しいな。



共通の思いがネットワークに

令和4年9月、子どもの居場所がテーマの映画上映会を企画した団体同士が、連携を呼びかけ、民間団体ネットワーク「こまねり」が立ち上がりました。令和6年6月現在、50団体と関係機関が参加、活動しています。個々の団体のテーマや活動内容は様々ですが、子どもの声に耳を傾け、一人ひとりの気持ちに寄り添う姿勢は同じです。1つ1つの団体は小さくても、つながり、協力することで、子どもたちへ伝える力も大きくなると考えています。

「すべてのこどもに居場所がある練馬に」を合言葉に様々な活動をしています

- 居場所の立上げ支援・広報
- 居場所でボランティアしたい方や寄付を募る
- 講演会などイベントの実施
- ホームページ、居場所マップの作成
- 支援団体の連絡会を実施
- 共通課題の勉強会の実施
- 個別ケースについて複数の団体・機関が連携した支援



他にも仲間がいっぱい

プレーパーク

練馬に昔からあるみどりを活かしてつくられた冒険遊び場です。

不登校

「学校に行かない選択」をした子のための多様な学びの場です。

体験

「子どもたちのやりたいことを実現する！」をモットーに、子ども主体で活動しています。

大学生による活動です。子どもたちがありのままにいられる居場所を目指しています。

居場所

赤ちゃんからシニア世代まで自由に過ごし、ホッとできる地域の寄り合い所です。

学習支援

「楽しく勉強をしたい」「ワイワイ皆でお話したい」学校の宿題をボランティアがお手伝いします。

子育て支援

練馬の子育てを孤独な孤育てにしないよう子育て世代も支援者も団体も一緒に活動しましょう。

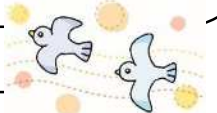
発達・障害

うちの子ちょっと個性かな?!と感じる保護者の方、一緒にゆっくりおしゃべりしましょう。

私達も「こまねり」メンバーです～参加団体からメッセージ～



石神井・小さなうちでは、学校へ行かない選択をしている子どもたちの居場所と地域の居場所活動を行っています。家と学校以外の居場所は、子どもにとっても保護者にとっても必要であると感じています。民間の居場所は、必要としている人だけではなく、学校や関係機関にも情報が届きにくい、ということに課題を感じています。子ども関係の活動をしている民間団体が、たくさんあることを知ってもらい、各団体や関係機関とつながりを作り、それぞれの強みを活かしたり、困っていることを共有しながら、子どもたちが安心できる居場所のネットワークを広げていければ、と思います。(代表 長谷部さん)



なゆたふらっとでは、不登校児の居場所やこども食堂を実施しています。活動の中で課題に感じていることとして、利用されている方の中には、一歩を踏み出すことが難しく利用が長期化する傾向がある方もいる、ということが挙げられます。本人が自分で考え、「自分はこれでいい」と思える、自分にOKをだせるようになってほしいと思います。一方で、なゆたふらっとを卒業した方は新たな環境でつながりができている方もいるので、そうした様子を知ると嬉しく思います。また、普段接点のない人や団体とつながる場も必要と感じます。(代表 鈴木さん)



I am OKの会は、練馬区社会福祉協議会の後押しを得て2004年に生まれました。発達障害のある子ども支援と保護者を支援することを目的とし、生涯にわたって、切れ目のない支援をめざしています。当初は発達障害を持つ子どもについてご家庭での工夫を集めることから活動を始めました。また現在では、児童発達支援事業とともに、所属する園や小学校を訪問し、養育環境や教育環境等について先生方と意見交換し、改善する活動(保育所等訪問支援事業)に力を入れています。また、親御さんには安心して話ができる支援者(ペアレントメンター)のいる居場所を提供しています。つながり合うことで、助け合えることを実感していただけたと思います。(代表 林田さん)

災害に備えた地域づくり

現状と課題

- ・首都直下地震をはじめ大規模な災害が想定されています。災害時に支援や配慮が必要な人々の「いのち」と「暮らし」を支えるためには、行政や社協、専門家に加え、地域住民やボランティアの力が必要です。
- ・近隣のつながりが希薄な地域では、自分の住んでいる地域にどんな人が暮らしているか分からないことから、災害時に孤立してしまう人が現れる恐れがあります。
- ・災害ボランティアセンターの存在を知ってもらい、災害時に困りごとを早期解決するためにボランティアの力を誰もが借りられ、またボランティアとして参加できるよう、平時からの周知や取り組みが必要です。

地域での取り組み

- ・近隣での日頃からの挨拶やちょっとした見守りが、災害時の支え合いにつながるよう、ネリーズの輪を広げます。
- ・地域には避難拠点運営連絡会や自主防災組織があり、地域住民が主体となり行政等と共に訓練や啓発に取り組みます。
- ・社会福祉法人や企業などは、災害時に施設を活用したり、専門性を生かした活動を地域の一員として行います。

練馬区社協の取り組み

- ・災害時の支え合いについて考えるシンポジウムや災害ボランティアコーディネーターの養成講座の開催を通じ、災害に備えた取り組みを行うとともに日頃からの支え合いの輪を広げます。
- ・住民や団体、関係機関と共に災害ボランティアセンターの運営訓練を実施するほか、オンラインツール等の活用、関係者や避難拠点運営連絡会等との連携を強化します。



地域でこんな取り組みが広がっています

災害時の支え合いを日頃から

啓発 災害シンポジウム

練馬区の震災対策、被災地における被災地支援の在り方などを学び、災害を風化させない機会としています。また、災害時にもお互いに支え合える地域力の必要性を学び、日頃からのつながり作りについて考える機会としています。

車いすユーザーAさんからの気づき

ある雪の夜、外出先からの帰り道で雪に車輪を取られ動けなくなって困っていたところを、通りすがりの人に声をかけてもらい、助けてもらいました。災害時のことを考えると、日頃から困っている障害者を見かけたら声をかけてもらえるとうれしいです。



人材育成 災害ボランティアコーディネーター入門講座

災害時、平時にも増して住民、地域活動団体、練馬区社協、練馬区等が相互につながり協力し合い、地域住民の生活を支えていくために、災害時に活用できる地域資源や日頃からの地域のつながりの大切さを学びます。

また、困っている人のつなぎ役や災害ボランティアセンターの運営など、災害時に必要になることを担い、積極的に活躍できるよう、災害ボランティアセンター立ち上げ・運営訓練への参加や卒業生の交流会も実施しています。

訓練 練馬区災害ボランティアセンター立ち上げ・運営訓練

練馬区災害ボランティアセンターは、練馬区と練馬区社協の協定に基づき設置され、被災による困りごとの受付、ボランティアの受け入れ、災害に関する情報収集と情報発信などを行う拠点です。

練馬区社協は、災害時に備えた訓練を関係機関や地域活動団体、地域住民と共に行うほか、関係者との日頃からの関係づくりに取り組んでいます。



地域の取り組み

練馬区聴覚障害者協会は、練馬区と協定を結び、避難拠点運営連絡会での訓練を行っています。普段関わることの少ない住民と共に訓練を行うことを通じて、お互いにいざという時に困ることに気づき、コミュニケーションの取り方などの課題を共有し、その解決を図っています。

また、顔見知りになれば外で会ったときに挨拶できるなど、お互いの理解と日頃のつながりづくりにもなっています。

福祉人材の育成

現状と課題

- ・少子高齢化の進展とともに、福祉を取り巻く環境が大きく変化し、福祉課題も多様化・複雑化しています。福祉サービスに対するニーズも急増しています。
- ・今後、福祉サービスを必要とする人が住み慣れた地域で安心して生活できるよう、個々の課題に適切に対応していくためには、担い手の確保と、より専門性の高い福祉人材の育成が重要な課題です。
- ・子どもから退職後のシニア世代まで幅広く、福祉の仕事に関心・興味を持てるような取り組みを行っていく必要があります。

地域での取り組み

- ・新たな福祉従事者を育成するため、各施設・法人で社会福祉士等の資格実習生の受け入れを積極的に行っていきます。
- ・地域の団体は、住民が福祉に関心を持ち、退職後など社会貢献として地域に役立ちたいと思えるような講座や講演会を企画・実施します。
- ・地域の団体や施設は、小学生・中学生・高校生等の体験学習（職場体験）を積極的に受け入れ、早い段階から福祉の仕事に興味関心を持てるきっかけを作ります。

練馬区社協の取り組み

- ・社会福祉士・精神保健福祉士・司法修習生等の実習や学校課題のボランティアを積極的に受け入れます。また、区内の事業所と実習受け入れ担当者の連絡会を開催し、実習受け入れ体制の強化を図ります。
- ・ねりま社会福祉法人等のネットでは、福祉のやりがいや楽しさを伝えるなど福祉教育に取り組みます。
- ・「市民後見人養成講座」など福祉の担い手の育成や、福祉のきっかけづくりに向けた取り組みを積極的に行います。



地域でこんな取り組みが広がっています

福祉人材の裾野を広げる

福祉のやりがいや楽しさを伝える ～ねりま社会福祉法人等のネット～

石神井地区では、中学生以上を対象に「気軽に楽しく福祉を学ぼう！！」と題し、保育・児童・高齢・障害の施設職員が福祉のやりがいや楽しさ、役割について、現場の声を伝える取り組みを行っています。

「ボランティアをしてみたい」という参加者もいて、福祉に興味を持ってもらうきっかけづくりになっています。



「気軽に楽しく福祉を学ぼう」の様子

実習生の受け入れ体制強化 ～区内の事業所～

区内の事業所の実習生受け入れ担当者同士が、実習教育の最新動向を学び、受け入れ状況等について情報交換をしています。実習生が他の事業所についても学びたいという希望があれば、説明や見学等の時間を設けて対応するなど、二次実習につながるような取り組みを更に進めます。



資格者実習受け入れの1コマ

傾聴ボランティアで地域の力に ～こだまの会～

高齢者の孤独を少しでも癒し、社会とのつながりを維持して、住み慣れた練馬でおだやかに暮らしていけるお手伝いしたいとの志で活動をしています。ロールプレイングを中心とした「傾聴ボランティア養成講座」を受講後に活動を始めます。傾聴では「自分をよく知ること、相手に寄り添うこと」が大切で、安心して活動できるよう、スーパーバイザーがサポートしています。最近では30代の方や外国籍の方の申し込みもあり、福祉に興味関心がある人が増えてきていると感じています。活動を通して、人生の先輩からお話を伺えることは貴重な経験になっています。

代表 篠さん(右)
事務 小高さん(左)



退職後は生きがいとなるような社会貢献を ～市民後見人～

定年退職後、社会との接点を持てる活動として地域で何か役立ちたいとの思いから市民後見人養成研修に参加しました。これまで、福祉関係の仕事や活動に縁は無かったのですが、社会福祉や権利擁護の考え方を学んだ後、市民後見人として受任しました。「明るく、楽天的に、前向きに」を心掛け、その方と良い関係を築き、安心し信頼されるような人を目指して活動しています。わずかでも誰かの役に立っていると感じられる気持ちが、自分自身を支える力、生きる力につながっています。



市民後見人 本間さん

誰もが参加できる地域活動の推進

現状と課題

- ・様々な地域活動が実施されている中で、参加者を増やすためには関心を持ってもらうことが必要です。活動内容への興味関心の高さが参加人数に反映されています。年代や性別を問わず、活動内容について「分からない」ことが不参加の大きな理由となっています。
- ・地域活動には、時間や期間等の選択肢の多さ、場所の身近さなどが求められています。
- ・地域活動に取り組む団体の多くでは、活動資金の安定的な確保や担い手の高齢化に伴う後継者探しが課題となっています。

地域での取り組み

- ・自身の得意な分野や体験を生かし、「自分のできること」で活動に取り組みます。
- ・ネリーズに登録し自身の取り組みを地域に発信します。
- ・他のネリーズとも交流する中で多様な活動の取り組み方についてのアイデアを得ます。
- ・これまでの地域活動や新しい活動が地域に根付くよう取り組みます。
- ・町会の回覧板や掲示板、公共施設へのポスター掲示などに加え、SNSなども活用することで、様々な団体の幅広い活動情報をより多くの人に届けます。

練馬区社協の取り組み

- ・ボランティア活動、地域活動についての相談や体験、講習などの機会を、多様な世代や状況の人が参加しやすい場所や時間帯を設けるなどして、活動への一歩が踏み出しやすくなるよう取り組みます。
- ・ネリーズ通信の発行やネリーズ交流会の定期的な開催、SNSの活用などを通じて、様々な活動の形や取り組みのアイデアを得る機会を設け、活動者や活動の理解者を増やしていくことで、地域活動を活性化します。
- ・地域活動団体同士が理解し合い、つながり合える機会を地域福祉コーディネーターが継続的に設けていくことでネットワークを強化し、ねりま社会福祉法人等のネットの活用も含め多様な社会参加の場を整えます。



地域でこんな取り組みが広がっています

様々な参加のかたち

～知りたい・やりたい・出会いたい・つながりたい～

きっかけはちょっとした気持ちの変化。入口はちょっとした関心。地域では様々な思いや関心を持ち活動している人たちや団体があります。その気持ちを受け止め、大切にできる地域を目指します。

だれもが何かができる場所！
入り口は「ちょっとした参加」
ネリーズ交流会



地域には、近くの
人たちとつながって
いくことで、
ゆるやかに見守り合っている
ネリーズがいます。
地域の良いところや一緒にやってみたいことを
気軽に話せる場「ネリーズ交流会」では「ちょっ
とした気になることや気づきを語り合っています。
ネリーズの輪が続々広がっています！

そこに行く人と人がいる！花がある！
「たのしく続けられるかな？」
きらら 花くらぶ



花が好き！図書館や
つつじ公園の花壇
きれいだな

参加はいつでも
だれでも大歓迎！
花たちとのおしゃべり



参加者同士の出会い・
交流 そこに行く
と役割がある！
仲間がいる！



様々なボランティア・地域活動をコーディネート (練馬ボランティア・地域福祉推進センター)

練馬ボランティア・地域福祉推進センターには、「地域で力になれることを何かしたい」地域住民や「地域活動と一緒に取り組む仲間がほしい」活動団体などから、地域活動に関する相談が寄せられます。現在活動しているみなさんの活動をはじめたきっかけはさまざま。そして、地域には誰かのためになって、自分のためにもなる活動もさまざまです。

練馬ボランティア・地域福祉推進センターでは、地域で活動する団体や施設等と顔の見える関係を生かして、誰もが参加できる地域活動の場を広げています。

相談
練馬区内に4か所あるボランティア・地域福祉推進センター・コーナーで活動に関する相談を受けています。

講座・報告会
ボランティア活動の基本的な理解や活動を始めるきっかけになる講座や地域活動の報告会を開催します。

ボラセンゼミ
ボランティア講座などの修了生が定期的に集い、地域の関心事や活動について意見交換の場を作っています。

多様なはたらく機会の拡充

現状と課題

- ・近年、日本の人口は減少局面を迎えており、高齢化の進行や労働人口の減少など、地域での担い手不足が課題となっています。
- ・年齢や国籍、障害の有無、ライフステージなどに左右されず、はたらくことを望む人がそれぞれのはたらきたいを実現できるよう、環境や制度を整えることが求められています。
- ・はたらくことが収入を得るための手段だけではなく、社会の一員として活躍する機会となるよう、一人ひとりのニーズに合わせた多様なはたらき方を構築する必要があります。

地域での取り組み

- ・地域の社会福祉法人などが連携し、それぞれの支援のノウハウを活かし、はたらきづらさを感じている人にはたらく機会を提供する取り組みを進めます。
- ・地域で障害のある人の就労支援を行う、就労移行支援事業所や就労継続支援事業所、行政機関や教育機関等の関係者が集まり、障害のある人の様々な就労について情報共有し、障害のある人が生き生きとはたらく支援・環境づくりを行います。
- ・地域の農業者と福祉事業所は、農産物の加工品の作成や農作業を通じて、障害のある人にはたらく機会を確保します。

練馬区社協の取り組み

- ・練馬区社協各部署の生活支援や就労支援のノウハウを生かし、ボランティア活動をはじめとする社会参加や就労に向けた第一歩を踏み出すためのプログラムを提供します。
- ・社会参加や就労の機会をつかめずにいる人へのはたらく機会の提供について、ねりま社会福祉法人等のネットの参加法人に呼びかけ、就労体験の充実を図ります。
- ・多様なはたらき方について、事業主等の理解を高める工夫や支援を行います。



地域でこんな取り組みが広がっています

一人ひとりが望むはたらき方を

多様なはたらき方を支える職場環境づくり～あかねの会～

あかねの会では、主に知的に障害のある人の発達支援から就労支援、生活・余暇支援まで、包括的な事業を展開しています。

理事長の吉田さんは、近年の障害のある人が企業などではたらく「障害者雇用」の広がりが、障害のある人の社会参加につながり嬉しい反面、社会に適応できないことで、失敗体験が積み重なってしまうという課題も浮き彫りになっていると指摘します。

「障害のある人一人ひとりが持っている力や可能性が当たり前認められ、受け止められて、多くの場面で活躍できる多様なはたらき方がある地域社会が理想です。」

また、法人の理事長としても、はたらく職員の年齢や障害、家庭状況などに応じた、多様ではたらきやすい職場づくりを心がけているそうです。

「職員の最高齢は80代。そのほかにも、子育て中だったり、以前は発達障害の特性がある職員も受け入れてきました。職員それぞれの状況に合ったはたらき方を模索しながら、その人が持っている能力を発揮してもらえるような職場環境づくりをすることが障害のある人の支援にも良い影響を与えています。」



理事長 吉田さん

就労体験で次の一步を踏み出す～ねりま社会社法人等のネット～

今まで就労したことがない、コミュニケーションをとることが苦手など、働きたいと思ってもその一步を踏み出すことに不安を感じている方がいます。そういった方々が少しでも自己肯定感が高まる機会につながるよう、ねりま社会福祉法人等のネットでは「就労体験」を行っています。

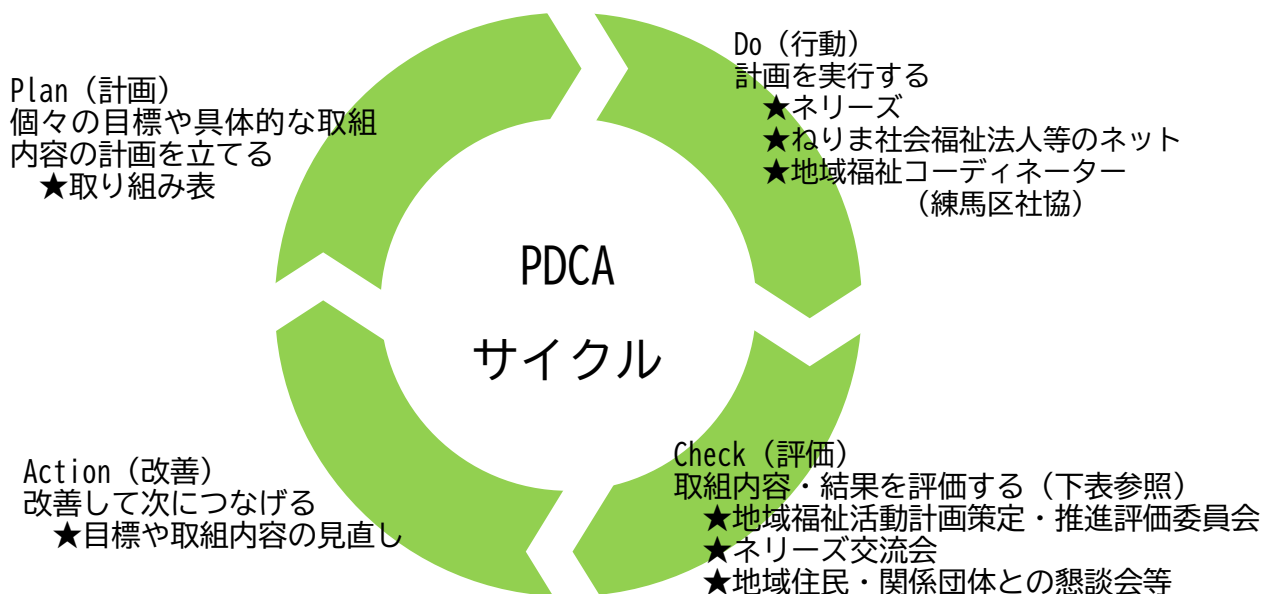


高齢者施設や障害者施設、保育園など対人援助の専門性のある社会福祉法人だからこそ、本人を受けとめ、見守り、次の一步を踏み出す自信を身につけられる環境を作ることができています。

特別養護老人ホームこぐれの里での農作業
を通した地域交流・就労体験の様子
<大泉こぐれファーム>

4 計画の評価

練馬区社協では、地域福祉活動計画を着実に実行していくため、取組項目ごとに具体的な取組内容や目標を掲げた「取り組み表」を作成しています。この取り組み表に基づき、地域福祉活動計画策定・推進評価委員会において、達成状況の評価を行います。委員からの意見や助言だけでなく、ネリーズ交流会や関係団体との意見交換を通じて寄せられた声や気づきも共有しながら、次年度の取り組みに反映していきます（PDCA サイクル）。



第6次地域福祉活動計画においても、計画の体系図に基づいて、取り組みの進捗状況を整理するとともに、地域住民や関係者等との意見交換等を通して、気づきを共有し、課題等を明らかにして、策定・推進評価委員会で報告、評価していきます。

地域福祉活動計画策定・推進評価委員会	計画推進、進捗管理、評価
ネリーズ交流会	意見交換、気づきの共有、評価、報告書作成、取組内容の確認 ※「ネリーズ通信」や「ネリーズかるた大会」も活用
地域住民・関係団体との懇談会、シンポジウム、ワークショップ	意見交換、気づきの共有、様々な視点からの評価

第6次地域福祉活動計画の策定に寄せて

明星マサ

人と人がつながることによって、誰をも排除しない地域をつくっていくことが使命であり核心であると自負している社協のど真ん中を直撃してきたのが、新型コロナでした。第5次計画実施のはじめの3年間は、外出の自粛や学校の休校など、人と人が直接顔を合わせることが制限されるという前代未聞の状況が重なった時期となりました。またコロナの影響による休業・失業等による収入が減少した世帯を対象に、生活資金の貸付窓口を社協が担うことにもなり、職員の仕事量が大幅に増え、他部署の応援も得て乗り切りました。突然の経済的困窮に陥った人たちの生活を支える役割を果たせたことは良かったと思います。

一見豊かにみえる現在の日本ですが、コロナのせいだけではなく十分な食事や教育を受けることが出来ない子どもの貧困率は、OECD（経済協力開発機構）38ヶ国中の19位、ひとり親家庭ではワースト5位という悲惨な状況が続いており、若者の貧困と共に看過できない問題としてあらわになったと言えます。そして2023年1年間に自殺した小中高生は507人という大きな悲しい現状も知らされています。この事実を私達はどうか考えたらいいのでしょうか。「国レベルで迅速に取り組みねばならない問題である」と言っているだけですまされるのでしょうか。

私たちは、コロナ禍にあっても感染予防を意識しながら、こどもたちの食と居場所を支え続けていた方々、家庭内暴力に救いの手をさしのべていた方々、その人らしさを生かしながら暮らしやすい地域をつくろうと、知恵と持てる力を発揮している大勢のネリーズ（地域福祉協働推進員）の方々の活動を、近くで見せてもらっています。苦境にある当事者はまさに「地獄で仏」にあったような安心と生きる力を得たことは想像にかたくありません。

コロナ5類移行後すぐに、計画策定委員は、手分けして多様な地域課題に取り組んでおられる団体を訪問させてもらいました。いずれも、必要なことを力強く粘り強く活動しておられていて、刺激を多いに受け、学ばせていただき、まさしく「地域は資源の宝庫」であることを再確認する訪問となりました。

第6次計画では、これまでに活動されている大勢の方々と「社会福祉法人等のネット」がつながり、協働していくことが計画されています。ひとつひとつの法人はそれぞれ特色のある専門性を備えて事業展開されており、これまでも得意分野の対応で助けていただいています。少子高齢化のスピードの速さの中でおきざりになってしまうこどもの問題や高齢者の孤立、触法予防・再犯防止という新たな課題、地域活動の担い手不足等々課題はつきません。地域課題満載の中の第6次計画ですが、住民視点のネリーズと専門的視点を持つ社会福祉法人等ネットと地域コーディネーターが多様な地域課題と一緒に取り組むことで生まれてくるものに大いに期待したいものです。

第 6 次 地 域 福 祉 活 動 計 画

令和 7 年度（2025 年度）～令和 10 年度（2028 年度）

発 行：社会福祉法人 練馬区社会福祉協議会

住 所：〒176-0012

東京都練馬区豊玉北 5-14-6 新練馬ビル 5 階

電 話：03-3992-5600

F A X：03-3994-1224

メー ル：<https://www.neri-shakyo.com>
